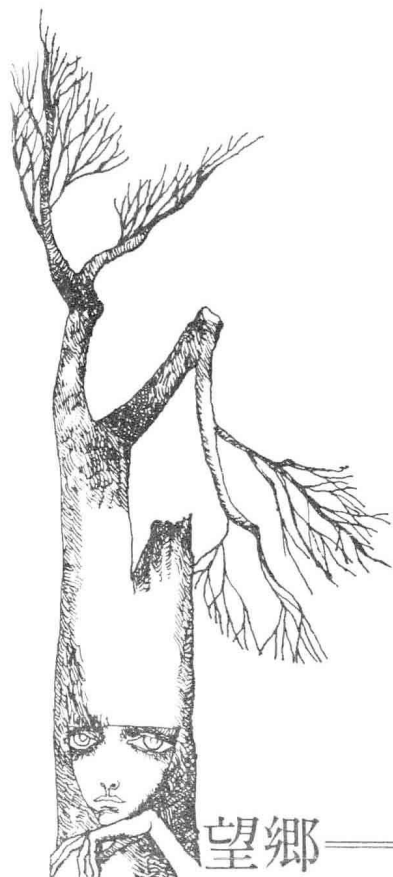




望郷

原田康子

Yasuko Harada



望郷———原田康子

Printed in Japan

望郷

著者 原田康子^{はらだ やすこ} ©

発行者 上林吾郎

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座四八ノ四

定価 四三〇円

昭和三十九年十月十日発行

印刷 図書印刷

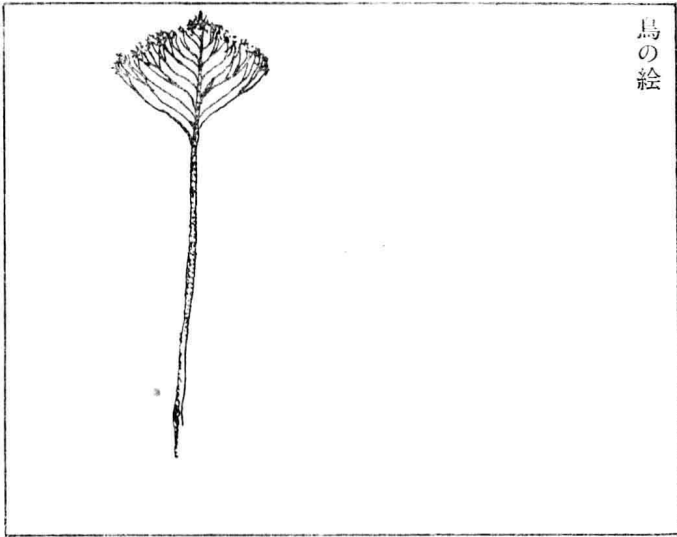
製本 矢崎製本

万一落丁乱丁がありましたらおとりかえします

望

鄉

装帧・カット
宇野亜喜良



私ははじめて彼を目にしたとき、私は茶の間の出窓の前に立って、籠のこま鳥に餌をやっていた。

風のない二月の夕暮れだった。西日が窓いっぱいに射しこんで私の片頬をあたため、鳥の羽毛や鳥籠の棧や乳鉢のへりをひかせていた。堀ぎわの裸木の梢も金色のひかりにくるまれ、板塀の割れ目や節穴からもひかりの線がいく筋もさしこんで、すすけた庭の雪をまだらにきらめかせていた。

こま鳥は餌に飽きかけていた。細くそいだ割箸の先に餌をまぶして籠のなかにさしこんでも、鳥は一瞬くちばしを近寄せるだけだった。それでも私は割箸を引っこめなかった。診察台の子供をなだめている歯医者のように、割箸をさしながら大きく口をあけ、鳥に口をひらかせようと苦心していた。

「ああん、ほら、ああん」

私はほんやり考えていた。十年後、二十年後、私は夕映えのなかで餌をついばんでいるこま鳥と、小鳥にむか

って口をひらいている娘の横顔とを描くだらうと。

私の周囲にはいつもと似たおだやかな夕暮れの時間があった。貯炭式のさびついた堅固なストーヴが、部屋を気持よくあたためていた。母はストーヴの横で厚い座ぶとんにすわって編物機をあやつり、背の高いうすよごれたソファのうえでは三毛猫が眠っていた。食膳にならぶはずの蟹とほうれん草の香りが台所のほうから匂い、部屋の隅に立てかけた描きかけのキャンパスの油絵の具の香りとまじりあっていた。ラジオは消え、おもてであそんでいる近所の子供たちの高い声がときたま耳についた。そして、私と母だけのぬくぬくした午後は、間もなく終るはずであった。妹がつとめ先の運送会社からもどり、高校生の弟も帰って来る時間が近かった。

やがてふと、目のはしに人影がはいった。私は割箸を持ちあげ、くちびるをひらいたまま窓のそとへ目を投げかけて、あつと目をとじた。夕日が真向から私の顔にあつたのだ。

私はせわしく目をしばたいた。門の脇の庭木のあいだに、黒っぽい外套姿の男が立っていた。目の粒はそのあたりにもちらばっていて、男の顔かたちははっきりし

なかった。光りの粒が無数にちらばり、おどっているモノのあのまばゆい夕景のなかに忽然とあらわれた影法師のようだった。

男は私の視線に気づいたようだった。木立のなかから抜けだしてゆっくり玄関のほうへむかって来た。

私の頬に血がのぼってきた。馬鹿のように口をあけてこま鳥の相手をしていたところを、そつとうかがわれていたように感じたのだ。夕日は窓硝子にもあたっていた、彼の位置からは私の容子もはっきり見えなかったかもしれない。けれども私が彼をみとめたとき、彼はすでに庭木の蔭にたたずんでいた。行儀のよい態度ではない。それでも、さほど悪い気持がしたわけではなかった。影法師は刑事のようにも、押売りのようにも見えなかった。手には荷物がなかった。

玄関のベルが鳴った。母が目顔で玄関へ立つようにながした。三年ほどまえにリュウマチを患ったあと、母は腰がおもくなった。とりわけ冬は、きまって痛みが右膝にもどるらしかつた。父の死後、私が東京にもどらなかつたのも、学費がつづかなかつたせいばかりではなく、立居の不自由な母にかわって家族の面倒をみる必要

があつたからだ。むろん、母に退学を強いられたのではない。

「左千子にだって学費くらいはつくれるんでしょ。あとお母さんがなんとかするわ」

母はかえつて私を力づけた。一年間浪人をしたあげく、ようやくはいつた学校であり、母のほうで退学を口惜しがつたのである。しかし私は、アルバイトをしてまで学校へ通う意地を失っていた。すでに私は、教室にいる時間よりも美術館にいる時間のほうが多い怠けものの画学生になつていた。東京中の美術館という美術館は、美的センスでもあるような絵ばかりで埋められていたようだった。モネ、シャガール、ゴッホ、スウラ、それらの画描きたちが描いたたくさんの絵は、私を奮起させるかわりに、ただただ私を魅了してしまつたのだ。チチキトクの電報が下宿にとどいた午前も、私はブリヂストン美術館の水のようにひっそりした照明のなかに立ち、ポナールの海の絵にぼんやり見入つていた。

私は鳥籠の前をはなれた。茶の間の横手にわずか一坪のホールがあり、ホールにつづいてやはり一坪の三和土がある。玄関の乳色の硝子戸に男の影がぼうつとうつつ

ていた。

私は胸にたれた髪をうしろにはねのけると、なんとはなしにひとつ咳ばらいをして掛金をはずした。西日と彼とが一緒に目にはいつた。けれども彼は、もう薄桃色の微光があふれたモネの夕景のなかの影法師ではなかつた。消墨色の軽そうな外套を羽おつた四十歳前後の男だった。ひろいきれいな額をしており、口元にはやさしさがあつて、一見、品位のある柔和な顔だちの持主だったが、頬は引きしまり、額の生えぎわには日焼けのあとが残つていて、引退した登山家のような印象も受けた。

「奥さまはおいでですか？」と彼は聞いて名刺を差し出した。

樹間から私をうかがつていた男と同一人とは思われないていねいな物腰だった。私は相手に気押されてぼんやり彼を見守り、やがてうろたえ気味に名刺をあらためた。『穂積木材 穂積東吾』という文字を私は読んだ。

会社の所在地は札幌市となつていた。私にははじめての名前である。私の家にも札幌には知合いなどないはずだった。

この年、私たち母子四人は北海道の東海岸にのぞんだ釧路市の高台に住んでいた。門の前には小学校のグラウンドがひろがり、塀とグラウンドのあいだの通りは三丁南で角度の急な下り勾配となつて、坂の肩には外海の一部がいつもきらりとのぞいていた。

付近には大きな出窓をもつた、昭和のはじめにつくられたような住宅が多かつた。私の家もそういう古めかしい様式の、二十坪あまりの木造平家建だつた。二年前の春、父が脳出血で急死したあと、私たちはあわたたしくこの家へ移つて来たのである。私たち姉弟が生れ育つた家は、担保物件として銀行の手にわたり、おかげで三百万ほどのこつていた父の借金はなくなつた。

私たち母子が、どうやら宿なしにならずにすんだのは、しあわせにも家作が一軒だけのこつていたからである。ただし、百坪ほどの裏庭は、引越して間もなく、母がいさぎよく手ばなして、そこをやわらかな芝生にかえ、昼寝をしたり、青天井のアトリエにしたいとひそかにもく

ろんでいた私をがっかりさせた。借金はなくとも、現金の収入など当時は一文もないありさまだったので、昼寝どころではなかつた。

部屋数は四つしかなかった。敷地も建坪もたつぷり五倍はあつたもとの家にくらべると、カナダとモノコほどのちがいがあつた。しかし、家族の数からみて決して手ぎまな家ではなかつた。むしろ、戸主を喪つた家族が引きつづいてあのいかめしい建物で暮していく場合を考えると、怪奇映画の一齣が目にかぶよう、私はぞくりとする。

ただ冬のあいだだけ、この家は私をすこし憂鬱にした。火の気のない自分の部屋で絵を描くわけにはゆかなかつたからである。一トン八千円もする石炭を、四つの部屋で盛大にたけるほど、私の家の暮しはゆたかでない。ストーヴのある部屋は茶の間ひとつだつた。で、長い冬のあいだ、茶の間は食堂となり、物干場となり、母の仕事部屋となり、私の画室となり、図案の仕事をする部屋となり、弟の勉強部屋ともなり、妹が映画雑誌をひろげながらラジオを聞く場所ともなり、そしてまた客間ともなつた。

茶の間にもどつて母に名刺を取りつくと、母の表情が軽くかわつた。税金の督促状を受けとつたときのように眉を心持ひそめた。どうやら、母にははじめての名ではないようだった。

「だれよ……?」と私は声をころしてきいた。

「機械を隅に寄せとくのよ」

母はこたえるかわりに言いつけると、名刺を帯のあいだにはさみ、両手を敷物についてそろそろと立ちあがると、右足を軽く引きずつて玄関へ立つて行つた。

私は目を見張つて母の小柄なうしろ姿を見おくつた。

母は穂積東吾を茶の間へとおすつもりらしい。蟹とほうれん草と油絵の具の匂いがただよい、畳のうえに絨毯を敷き、ソファと肘かけ椅子と座ぶとんと和机と事務机とがちらばり、洗濯物までぶらさがっている、和洋折衷とも言いがたい混沌とした部屋へ最初の客をとおすらしい。日頃のつつしみ深く慎重な母には似あわぬ対応だった。

ひよつとすると、彼は母の大むかしの恋人かもしれないと考へて私は笑いを噛みこころした。母は四十七歳だった。五年ほどまえまでは母の頬やくちびるにもなまめい

た艶があつたが、ちかごろは目尻にしわがふえ、私や妹にしよつちゆう白髪を抜かせていた。みにくくはないにしろ、若さを失つた母のまえに突如恋人があらわれるなどとは考えただけでも滑稽だった。

穂積東吾は母にみちびかれて茶の間にはいつて来た。

背広姿にかわると、すらつとした男だった。しかし、決して華奢ではない。背もそれほど高くはない。すこし青味がかつた地味なダレエの上下を着て、袖口の真白なカフスが清潔に見え、私はなんとなく、タンポポでうまつた原っぱに、ふらりと迷いこんできたイギリス大使を連想した。もちろん私は、イギリス大使がどんな人物なのか、すこしも知らなかつたけれども。

「娘でございます」

母はさりげなく私を彼に引きあわせ、私に紅茶の用意を命じた。

穂積東吾は私にはほえみかけて椅子に腰をおろした。私が生れるまえから使われていた時代物の椅子である。

最後に張りかえたのは七年まえで、まっすくな背のふちにはこけおどしの彫刻があり、腕木には父のこした煙草のこげあとがいっぱいあつた。

客はでも、そんなことに気づかなかつたようである。

穂積東吾はストーヴのがわの腕木に軽くもたれ、煙草をポケットからさぐりだしながらもめずらしそうに部屋を見まわすと、ふっと放心したような表情にかわって、さびついたストーヴに目を落とした。安堵と疲れとが彼の顔をよぎったようだった。

紅茶は居間の飾り戸棚のなかにはいつていた。茶碗もスプーンも砂糖壺も茶漉しもおなじ場処にあり、ストーヴのうえでは薬罐のお湯が煮たっていて私は一度も席をはずさずに紅茶をいれ、三毛猫の横にそっと腰をおろして、母と客とのやりとりを最初からすっかり聞くことができた。

穂積東吾は私の家の土地を買いに来たのである。もつとも私は自分の家に土地があるなどとは知らなかった。私たち一家にのこった財産といえは、この小さな家と、このまわりの五十坪にも充たない土地だけだと、このときまで思いこんでいた。

だから穂積東吾が話を切り出した瞬間、私はぎょっとした。あらたな債権者があらわれて、私たち母子はこの家からも追いたてられる羽目になったのではないかと、

私は早合点をしたのだ。

要するに、穂積東吾の言葉から私が知ったことは、おおよそつぎのような内容の話だった。

穂積木材では郊外に工場と木場とを持っているが、鋤路で仕事を始めてから日が浅いため、木場がせますぎる。私の家の土地は木場と隣合わせており、ひろさも五百坪近くあって、これを合わせると木場としては申しぶんがない。地価はだいたい坪七千円と穂積木材ではみていた。

「あのへんのことですから値はまだあがるでしょうが」と穂積東吾はおだやかに母を見た。

「わたくしどもの言値も出鱈目なものではないはずです。お調べいただくとおわかりと思いますが」

私はまじまじと穂積東吾を見守っていた。一坪七千円の土地が五百坪も私の家にはあったのだ。五七の三十五で三百五十万円、と暗算して、私は思わず大きく息を吸いこんだ。

けれどもおどろいたのは私ばかりだった。母は軽く首をかしげて生真面目に相槌を打っているだけであり、相手の態度はさらにさりげがなかった。彼は紅茶と煙草を

くつろいだ姿勢でのみ、大金の話をしているのに、その声にはうわずったところがなく、ひとかけらの媚びもなく、お天気を話題にしたときとほとんどかわりはなかった。かといってあいまいな口ぶりでもない。要点はいかにもはっきりしていて、いくらか事務的な匂いがあった。

私はふっと父の来客たちのさまざまな声を思いだした。高飛車な声や切羽つまった声、にこった声とそれから猫なで声、彼らは債権者か、でなければ父からお金を引きだそうとたくらんでいたろくでもない客ばかりだった。

穂積東吾は、また安堵と疲れとがまじったようなぼんやりした表情にもどっていた。母は気づかなかつたかもしれない。私だけが傍観者の目で見えた顔かもしれない。しかし、私には、ストーヴのぬくみや、紅茶やほうれん草の香りが彼の神経を一瞬やわらげ、はっとわれにかえって言葉を足したように思われた。

「お支払いは全額、即金でいたします」

「は？」と母の顔色がゆらいだ。

母はすこし口ごもって、

「子供たちがおりますので。相談をいたしました……」
むろん、いまご返事をいただけるとは思っていない。

五、六日中に支店の者を差しむけるから、それまでにご返事を願いたいと、彼はていねいにたのんだ。

「札幌へお帰りでございますか？」と母が用心深くきいた。

「今夜発ちます。夜行は疲れまずな」

相手も言葉に注意をはらって、二つの取引銀行の名と、それぞれの銀行の支店長の名をおしえた。二つの銀行で穂積木材の経営内容をたしかめてほしいという意味のようだった。一つは東京に本社のある銀行、他は札幌に本拠をおいた銀行で、二つとも大銀行だった。

「銀行にはこちらから話しておきましょう」

穂積東吾はほえんで立ちあがった。

母が彼をおくりだした。

二人の挨拶をドア越しに聞きながら、私はそっと三毛猫の横をはなれて鳥籠のまえに立った。

日は落ち、空は桃色にかわっていた。彼は来たときとおなじようにゆっくり門のほうへむかって行つた。イギリス大使のようではなく、引退した登山家のようでもなく、三百五十万円の買物に来た男のようでもなかった。今夜汽車に乗らねばならない、すこし疲れた旅行者のう

しろ姿としか見えなかった。
彼は門の近くで一瞬足を停め、けれども振りかえらずに、そのまま門から出て行つた。

三

私の家にはたしかにまだ五百坪近くの土地がのこつていた。

母の説明によると、正確には四百八十五坪の土地で、下町の盛り場から二軒ほど北へへだたり、札幌まで通じる幹線道路にのぞんでいた。あたりはこの数年間にわかにひらけた地帯である。北郊外は敗戦まではだれもかえりみなかった湿地帯だった。十年ほど前、母はその土地を父に無断で母名義の土地にかえた。父は私たち家族にとつて、なんとも剣呑な人物だったからである。

私の家もむかしはかなりの土地を持った地主だった。私たち姉弟が生れるまえの話である。初期の開拓時代には、男に腕さえあれば厩大な土地を手に入れることができたのかもしれない。父の言葉を真にうけると、前島の土地を通らずに二丁とは釧路の町を歩けたものではない

と、いうていどの土地を曾祖父や祖父は持っていた。それらの土地は昭和初期のバニックで大半消え、のこりは父がつぎつぎと手ばなした。牧場、水産加工業、木材業と、なにをやっても父は駄目だった。私が生れたころには、もう土地だけにたよって暮しているような生活がはじまつていて、私たち姉弟は酔つた父の口から、西部劇の筋書のようなむかし話を聞かされただけにすぎない。父はお酒好きで絶えず酔っていた。

死んだ年の新年も、医者から酒、煙草をとめられていながら父はウイスキーのグラスを手にし、母と私たち姉弟がトランプあそびをしているかたわらで、とろりとした目をうるませ、

「むかしはね、前島の土地を通らずに……」

「それがどうなつたつていうのよ」と妹がすかさず父の言葉尻をとらえた。

妹は私の倍ほどのリアリストでこましゃやくれだった。

「お父さんがすつからかんにしたんじゃないの」

「わたしはがなくしたわけじゃない」

父は目をばちばちしばたいたいて、ほんのすこし面映ゆそうに笑った。私は妹にむかつて片目をつむつた。粉雪

が刷毛でよくような音をたてて窓にあたっていた。

妹は形のよいバタ色のあごを突きだして、

「じゃあ、だれがなくなったのよ」

「わたしは判こをついたただけだよ。だれも約束を守らなかった……」

父は相手かまわずに保証人の役を引きうけ、矢鱈と借金肩がわりをしていたようだった。相手かたはむろん、父のひとのよき、気の弱さを百も承知のうえである。要するに自分でなくしたのも同然で、そういう工合に失った財産を、父はほうっとなつかしんでばかりいたのだ。酔ったときの父は、子供たちの目から見ても赤ん坊のよう^うに他愛がなかった。

母がひそかに土地の名義をかえたのもふしぎではない。十年前、子供たちはまだ小さかった。父に万一のこともあれば、母子四人はたどころに無一文となつて、生活扶助でもうけなければ生きてはゆけないようなおそれさえあった。郊外の安い土地でも母名義にしておかなければ、母は不安でならなかったにちがいない。父の死後、母が狼狽をみせなかったのも、芯がきついせいばかりではなく、実は四百八十五坪の土地の保証があつたためと

思われた。

それでもやはり母の話は私をおどろかせた。

「で、お母さんは値あがりを待ってたの？」と私は息をはずませて聞いた。

「いえね……」と母はほうつと顔を赤らめた。

これまで買手がなかったわけではない、話は二三あったけれども、父が生きていたので手ばなすつもりはなかった。父の死後、はじめて話を持ってきたのが、去年の秋に一度顔をだした穂積木材の支店長という男だったと、母はすこし早口に説明した。

「あなたと圭子^{かた}を嫁づけてね、市夫の学資にと思つたのよ」

「あとはお母さんのぶん？」

母の目がふいにうるんだ。私は口をすべらせたような気がしてはっとした。母が自分の老後を心配するのは当然だった。母はもう若くはないし、ましてリュウマチの持病があるのだ。

しかし、母の一瞬の涙は、私に凶星をさされたせいというより、ながいあいだの気苦勞がむくわれてふつと気がゆるんだせいのように思われた。穂積東吾の言葉を信

用すると、四百八十五坪の土地はいま一坪七千円の価値があった。

母はじき気をとりなおして、

「みんなのものですよ」

「だけど、どうしてだまっていたのよ」

ほんとになぜ、私たちにかくしていたのだろうと、私はにわかにいぶかしんだ。知ってさえいたら、私もあと二年間は家族に遠慮をせずに美術館に日参できたはずである。結婚資金など、なくたっていい、と私はすこし母をうらんだ。

母は私の不服を読みとったようだった。編物機を私にはこびださせて、

「財産がありますとね、つい寄りかかってしまいたくなるものですよ」

私は母の器用な手のうごきをみながら、母の深慮遠謀に気づいた。母は子供たちが父に似ることをおそれたのだ。たしかに母にあまやかされた場合、私は烏口など絶対にぎらなかつたにちがいない。私には母があっばれすぎて、味気なさといまいますを感じたけれど、母をこれほど賢くかえたのはもちろん父だった。

四

母と話しているうちに弟が帰り、妹ももどって来て、母は妹からも矢継早な質問をあげねばならなかった。私に母にわかってことの次第を二人におしえ、その夜私たち母子は、穂積木材への返事について話し合った。

母は乗気になっていた。二年後には弟を進学させねばならず、私と妹の婚期もそろそろ近づいている。値は思いがけぬほどあがっており、なによりも穂積木材をだいたい確実な相手と見たからである。銀行で会社の内容をしらべるようにというのは、よほどの自信がなければいえる言葉ではない。穂積木材が危険な会社であった場合、銀行はありのままに私たちにこたえなくとも、言葉をにごすにきまっている。晩年の父が銀行からどれほど素気なくあしらわれていたか、私でさえ知っていた。

弟が真先に母の言葉に賛成した。弟は和机にむかってトランジスタラジオを分解中だった。彼ののぞみは何年かのちに電気技術者になることであり、そののぞみのさまたげとなるような話ではなかった。

私も弟につづいて同意した。私は母の言葉をもっともだと思い、土地なんかを後生大事にかかえこんでいるより、さっさとお金にかえたほうが気分がいいと考えた。ちょうど切らしかけたジंक・ホワイトがほしかったし、キャンパスだって大きいのを買える。また私の心には、穂積東吾への興味もひそんでいた。私は彼をもう一度くらい見たいような気がしていた。穂積木材との話さえすすめば、彼が私の家に顔をだす可能性はあった。妹だけが同意をしぶった。給料の三分の一は必ず貯金をしているような妹である。

「ほっとくとまだあがるわ」と妹は言い張った。

母に、圭子がお嫁にゆく時分に買手がつくかどうかはわからない、あのへんは住宅地でないから買手がいつもひかえているというわけではありませんよ、と説明されて妹もようやく考えこみ、私はくすりと笑って妹を怒らせた。

妹を笑うのはまちがっていた。妹が貯金に熱心なのも、お金を大事にしなければ、気に入ったドレスの一枚も買えないと知っているせいなのだから。それでも、妹がお金について計算器のようにはっきりした態度をしめすと、

私はやはりおかしかった。

翌日、私は母の言いつけで穂積木材の取引銀行に行かせられた。穂積東吾の言葉を鵜呑みにして、先方の調べを怠るような母ではない。四百八十五坪の土地は私たち一家の最後の財産だった。

ただし私にとっては、すこしもありがたくはない役割だった。行きつけの印刷所のうすよごれた入口の通用門をくぐるように、無造作に銀行にはいって行けない。会わねばならぬ相手が支店長とあってはなおさらだった。むろん私は、これまで一度も銀行の支店長などとお目にかかったためしはない。恰幅がよく、一万円札のように尊大な容子をした人物かもしれないと考えただけで、私の口のまわりの筋肉はこわばりそうになった。

だが、リュウマチの母を銀行へ行かせるわけにもゆかなかった。銀行は下町にあつて、途中には長い坂道があり、川風が吹きつける河口近くの橋もある。そして町にはまだ雪があった。

私は地元銀行をあとまわしにして、内地銀行の支店にむかった。父の最後の借金を差しおさえたのがその地元銀行であり、私がたびたび預金を引きだしに行く銀行も

おなじ地元銀行であったからだ。母の内職と私の図案の手間賃と妹の給料をあわせても、私の家の月々の収入は三万そこそこである。夏はともかく、燃料費のかさむ冬は暮せるような金額ではない。そのうえ母は、私と妹にはそれぞれの収入の半分を自由に使わせていた。母には成算があったことにしろ、これまで私たち母子は、裏庭を売りはらったお金で、不足分をおぎないながら暮してきたのだ。

内地銀行の支店は下町の目抜き通りであった。行きつけの地元銀行よりはひとまわりほど小さい、セピア色の矩形の建物だった。

私は人差指で一度大きな扉をつつき、それからしのびこむようになかへすべりこんだ。

客はまばらだった。どの銀行も週日の午前中はこうだった。壁や床やカウンタアは銀行以外のどこのようでもなく、清潔でびかびかしていて、空間がたっぷりあった。私は鍵の手にまがったカウンタアにそっと近づき、最も話しかけやすそうな女子行員を物色して、母から言いふくめられたとおりに用件を切りだした。

穂積東吾はたしかに銀行に話をとおしてあった。女子

行員は上役らしい男に話をつたえると、私をカウンタアの奥の応接室に案内し、ひとり私をのこして出て行った。立派な椅子があり、厚地の重そうなカーテンが窓の両脇に寄せられてあって、上顧客か、こみ入った用件を持った客をとおす部屋らしかった。私がここにとおされたのも、穂積木材がいい客である証拠にまちがいはなかった。

私ははっと肩から力を抜くと、爪先立ちで窓に近づいた。窓の下は裏庭で、スクウタアが二台とブロックの塀と鉄格子のいかめしい通用門が見えた。塀ぎわにかきあつめられた雪はやはりうすよごれていた。

間もなく男が一人はいつて来た。分厚い眼鏡をひからせた小づくりの中年の男だった。男は一瞬、眼鏡の奥の目をまたたいて私の容子をうかがい、たちまち客なれしたなめらかな口調で、支店長はいにく札幌へ出張中だと言ひ、次長だと名乗りながら私に椅子をすすめた。瘦せているのは支店長でないせいかもしれない。けれどもやはり、親しめそうな相手ではなかった。

私は小声で挨拶をして椅子に浅く腰をおろした。そのあいだに女子行員が紅茶をはこんできた。私と同年輩の